

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 5 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520352

研究課題名(和文) 19世紀後半から20世紀初期のロシアにおける文学生産の場と知覚様式の変容

研究課題名(英文) Field of literary production, the changes of media technology and theories of perception in Russia from the second half of the 19th century to the first half of the 20th century

研究代表者

貝澤 哉 (Hajime, Kaizawa)

早稲田大学・文学学院・教授

研究者番号：30247267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀後半から20世紀初期のロシアにおける文学生産の場の大きな変化と、当時のメディア・テクノロジーによる知覚様式の変容や、哲学、心理学などにおける知覚理論の発達との関係を、あらたな視点から確認することを目的としている。これまでのロシア文化史、文学史研究においてはこうした視点はほとんど普及しておらず、本研究はこの分野の先駆的試みと言えるものである。本研究では、20世紀初頭のロシア・フォルマリズムに代表される文芸理論の新しい流れと、当時のメディア・テクノロジーや知覚理論との関係を解明し、さらに当時のロシア思想・哲学における表象・言語理論と、西欧の知覚理論との関係を検証した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to explore and characterize the big changes which had occurred in the field of literary production in Russia from the second half of the 19th century to the first half of the 20th century, especially from the viewpoint of its close relationship with the appearance of new types of media and technology in the field of culture, and also with the remarkable progress in the psychological and philosophical theories of perception.

As a result of the study we found out that the appearance of the new waves of literary theories at the beginning of the 20th century such as Russian Formalism was very closely tied with the popularization of cinematograph, and it also was strongly stimulated by the psychological and philosophical theories of perception, especially by Buntt, Bergson, Husserl, Sesemann, Shpet et al.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：文学生産の場 メディア テクノロジー 知覚 文学理論

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者が平成 17 年度から 19 年度におこなった、科研費基盤研究(C)「19 世紀後半から 20 世紀初期ロシアにおける文学生産の場の社会史的研究」(課題番号 17520210)において、1870-90 年代に、ロシアの読者層の急速な拡大と変化、出版・流通のテクノロジーのきわめて大規模な変動、雑誌などの文学媒体(メディア)の形態の大きな変容がおこり、それがこの時代の文学、文化の形態や社会的機能を大規模に変容させたことが判明したのだが、その調査の過程で、1890 年代に登場した映画という視覚メディアや、レコードなどの聴覚メディア、さらに知覚や感覚に関する哲学、心理学、精神生理学の理論(ブント、ヘルムホルツ、マッハ、アヴェナリウス、ウフトムスキイなど)が、文学のあり方そのものに大きな変化をもたらしていることがわかってきた。

(2) 映画は、その視覚的な効果の直接性によって急速に大衆化し、文学の特権的地位を脅かしただけでなく、その技術的な成り立ちによって、文学や芸術そのものが実は技術的にできているのではないか、という疑いをもたらし、文学研究への急速な科学・技術化を促した。

ロシア・フォルマリズムの文芸学者たちや、またバールイ、ナボコフ、アンネンスキイやアフマトワ、ザミャチン、バーベリ、オレーシャ、プラトノフら 20 世紀前半の作家たちは、映画の技術的成り立ちとのアナロジーで文学を技術的に解明しようとし、また技術や知覚・感覚理論を前面に押し出し、文学における視覚・聴覚性を極度に意識した作品を生み出した。

またフロレンスキイやバフチンらの美学・文学理論もまた、当時の知覚理論を応用したクリスチアンゼンやヒルデブランド、マッハ、ウフトムスキイなどの美学や精神生理学理論をその背景に持ちながら、ロシア独自のイメージ論や身体論を形成した。

つまり、この時代のロシアの文学生産の場の大きな変動には、実はヴァルター・ベンヤミンが「複製技術時代の芸術」において指摘したような、この時期のロシアでおこっていた大規模な「知覚の様式の変容」がきわめて重要な役割を演じているといえるのである。ロシア文学・文化の研究では、この時代を上記のような観点から扱おうとしたものはかつてないと言ってよい。ヨーロッパの文化研究では、上記のベンヤミンからこうした「知覚の様式の変容」についての考察がはじまり、ジョナサン・クレーリ『観察者の系譜』『知覚の宙吊り』は、西欧芸術文化と知覚理論の深いつながりを歴史的にあきらかにし、キットラー、ストイキツァ、ディディ=ユベルマンらが文化とメディア、知覚理論の関係を問題としてきた。

(3) こうしたテーマの研究は、当時ロシア、欧米、日本ともにほとんど例がなく、新分野

を早急に開拓する必要性があった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、19 世紀後半から 20 世紀前半のロシアにおける文学生産の場の大規模な変動を、当時登場しつつあった新しい視覚・聴覚メディアや、それを背後から支えた新しい知覚理論や技術のコンテキストに置きなおし、これまでのロシア文学研究にはない、「知覚の様式の変容」という視点からとらえなおすことを目的としている。

(2) 申請者は、バフチン、フロレンスキイ、ナボコフ、バールイらの作品のなかで視覚メディアや知覚理論、心理学などがはたす役割についてさまざまな業績を残しており、本研究ではこれらの個々の研究を統合し、より広い視野から、この時代のロシアにおこった「知覚の様式の変容」の過程とその独自性を具体的にあきらかにする。

3. 研究の方法

(1) 新しい視覚メディア・テクノロジー(映画、グラモフォン、ラジオ、通信など)の出現がもたらした文学生産の場における知覚・感覚様式の変容とそのロシア的特色の研究。ここで中心となるのは映画である。上述のように映画出現の影響ははかり知れず、他の芸術・文化自体をも操作的・技術的に把握する志向を広め、映画独自の視覚的知覚様式に対抗する文学独自の言語的知覚様式の前景化を促進したのみならず、映画が文学の原作を使用することで、文学の普及形態そのものを多元的・メディア横断的に拡大し、「国民文学」観念の創出にも貢献した。さらに録音技術がフォルマリズムの文芸理論にはたした役割についても注目すべきだろう。

ソヴィエト初期にはトーキー映画の出現で事情は複雑になる。視覚像と音声とのシンクロは、身体や声の擬似的な再統合をもたらし、スターリン時代のアレクサンドロフ、プイリエフの映画における健康的で力強い女性労働者像のようなイデオロギーと一体化した統一された身体感覚を生み出した。知覚様式の変容は、テクノロジーによる身体感覚の断片化・部分の肥大から、知覚の身体的全体性・統一性の回復へと変化したのである。研究期間前半でこの過程を検討する。

(2) 新しい知覚理論、感覚理論(哲学・心理学、美学、精神生理学など)のロシアにおける流行・展開と、文学・文化のテクストのなかへのその浸透、そこで生まれるあらたな知覚様式のロシア的独自性の解明である。19 世紀後半には哲学・心理学における知覚理論の飛躍的発展がロシアにももたらされた。ロシアでは、西欧の知覚理論はさまざまな批判に晒されるとともに、ウフトムスキイなどロシア独自の感覚理論を生み出し、それはバフチンやフロレンスキイをはじめとする人格論的な身体理解や感覚理解へと展開される。またそれらは(1)の映画やモダニズム、アヴァンギャルド文学・美術における独自の知覚・感覚理解とも有機的につながっているの

である。しかし、こうした知覚理論とその独自の理解は、従来のロシア文学、文化研究ではほとんど検討されることがない。研究期間の後半でこうした知覚・感覚理論の批判的受容とロシア文学・文化・思想との深い結びつきを検証する。

そこでまず、関連の一次・二次資料の探査・収集をおこなう。該当時期のロシアにおける映像資料および映画、グラモフォン、ラジオ等やまたそれにかんする文献類の調査および収集、さらに書籍資料の渉猟をおこなう。さらに資料の読解とその理解および位置づけをおこなう。またそのため、メディアや知覚にかんする方法論を獲得するための一般理論の研究を行う。そして、成果の発表(論文執筆、学会発表)とその反響のフィードバックをおこなう。研究成果をたんにアカデミックな専門家の狭い範囲にとどめるのではなく、広く一般の読者にもわかりやすい形で公表してゆく。

4. 研究成果

(1) 20世紀初期の新しい文芸理論の登場は、世界の文学のその後の流れに大きな影響を与えた。ロシア・フォルマリズムの出現はその代表的なものであり、こうした文芸理論の普及は、文学生産の場のあり方の大きな変化を反映したものであり、その背後には、文学生産自体をテクニカルにとらえようとする志向性が隠されている。本研究では、フォルマリズムの文芸理論と、当時のメディア・テクノロジーや知覚理論との関係をさまざまな角度から検討した。その結果、フォルマリストたちの「詩的言語」概念の背後には、これまでの記号論・構造主義的見方とは異なり、当時の心理学や聴覚理論などの新しい知覚理論や録音テクノロジーなどがあり、断片的な知覚から生きた身体のあり方を再構成するという考え方がそのベースとなっていることが明らかとなった。

(2) さらに、こうしたフォルマリズムの文芸理論にたいする当時の哲学者、思想家たちの反応を検証することによって、フォルマリズムの文芸理論が、ソシュールの言語観に基づく関係論的システムではなく、対象の存在論的実在を直観的に把握しようとするロスキイ、セゼマン、シペートの哲学理論や言語論とつながっていること、さらにその理論的背景として、ベルクソン、フッサールらの知覚理論が大きな役割を果たしていることが検証できた。

(3) 同時にまた、フロレンスキイ、パフチン、ローセフ、シペートといったロシアの思想家たちの言語論に特有の、言葉をリプレゼンテーションでなく、イデア的かつマテリアルな実在ととらえる独自の理論が、実はフッサール現象学などの、知覚と身体にかんする理論と深い関係にあることもわかった。

(4) 映画とのかかわりでは、20世紀初頭のナボコフの、映画がか大きな役割を果たす小説『カメラ・オブスクーラ』、『絶望』を翻訳

するとともに、その解説および個別の論攷において、ナボコフの小説生産の技法が、当時の映画の普及とのかかわりのなかで、映画メディアの特性と小説メディアの特性との関係という問題を極度に意識したものであることを解明し、20世紀の小説の特徴である言語メディウムにたいする過度の意識が、映画との関係のなかで形成されてきたものであること、またイメージと言語記号の互換性にかんする探究が、この時代の小説生産のあり方を考える場合きわめて重要であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

貝澤哉、擬態への不可能な欲望 ウラジミール・ナボコフ『絶望』についてのノート、早稲田現代文芸研究、査読無、第4号、2014、18-34

貝澤哉、哄笑される悲劇、あるいは小説は存在しない ミハイル・パフチンの小説論における「悲劇」と「笑い」について、早稲田現代文芸研究、査読無、第3号、2013、36-49

貝澤哉、ポストモダニズムとユートピア/アンチユートピア 現代ロシアにおける「近代」の超克、塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界3 記憶とユートピア』東京大学出版会、査読無、2012、77-100

フォルマリズムはフォルムを拒否し破壊する 同時代の知覚・認識理論とロシア・フォルマリズムの「異化」概念、早稲田現代文芸研究、査読無、第2巻、2012、84-99

詩的言語における身体の問題：ロシア・フォルマリズムの詩学をめぐって、スラヴ研究、査読有、第58号、2011、1-28

〔学会発表〕(計3件)

貝澤哉、ФОРМАЛИСТЫ ОТКАЗЫВАЮТСЯ ОТ ФОРМЫ И ХОТЯТ ЕЕ РАЗРУШИТЬ — ВОКРУГ ФОРМАЛИСТСКОГО ПОНЯТИЯ «ОСТРАНЕНИЕ», ソフィア・シンポジウム「ロシア・アヴァンギャルド芸術100年」РУССКИЙ АВАНГАРД〔主催：上智大学、共催：日本ロシア文学会〕、上智大学図書館9階 L921教室、2013年10月31日

貝澤哉、ユーリイ・ティニャーノフの詩的言語論 身体の不在とその構築、シンポジウム《文学理論を身体化する》〔日本比較文学第51回東京大会〕、早稲田大学文学学術院〔戸山キャンパス〕36-582教室、2013年10月20日

貝澤哉、P.A.Florensky's Idealistic-Materialistic Concept of Icon: Image as Non-representation、ICCEES VIII World Congress 2010 (Stockholm 26-31 July)、2010年7月

〔図書〕(計 件)

貝澤哉、野中進、中村唯史 編著、再考 ロシア・フォルマリズム 言語・メディア・知覚、せりか書房、2012年9月、225
〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

貝澤哉 (KAIZAWA, Hajime)

研究者番号：30247267

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：